

世界の著名な特許にみる ————— 第11回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

“からくり儀右衛門” こと田中久重（東芝の祖） その1
～「東洋のエジソン」と呼ばれて～



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

はじめに

今月号から、発明事業列伝は新シリーズに入ります。エジソンの次に取り上げる発明事業家は、なんと日本人！

それも幕末から明治（寛政11年-明治14年、1799年 - 1881年の82年間）を生きた発明事業家、「からくり儀右衛門（ぎえもん）」の異名をもつ、田中久重翁（翁とは、老齢の方に親しみを込めて呼ぶ敬称）。をお伝えしていきたいと思います。私のイチオシの方なのです！



晩年の田中久重翁

ちなみに、エジソンの次にくる発明者の予想として、「エジソンの最大のライバル、グラハム・ベルではないか？」と思われた方もいらっしゃるのではないかと思います。もちろん、そのベルも今後の連載にて、ご登場頂

きますが、エジソンの次に田中久重翁がくる、というのは予想を超える人選ではないかと思われました。

実は、すでに幾人かの方に、「エジソンの次は、田中久重ですよ」と興奮気味にお伝えしてみたところ、殆どの方から「？」という反応が返ってきました。

これは、予想を超えるも裏切るまでもいかず、皆様の率直な感想としては、「そもそも、誰なのでしょうかね？」という反応が返ってきたというわけです。

そこで、第一回目としては、「あの偉大なエジソンの次に、この素晴らしい田中久重翁を書きたい！」と思った筆者の心境を書いていきたいと思えます。

また、たまたま直近の周囲の方の反応はそうだっただけで、隠れ？田中久重翁ファンもいらっしゃるのではないかと、思っています。

知財立国日本の立役者であり、尊敬申し上げる荒井寿光先生（元特許庁長官・知的財産戦略推進本部初代事務局長）が、御著書で日本の偉人発明家を取り上げておられ、その中に、田中久重翁の名を見て、とても嬉しかった記憶があります。そしてもう大分前になりますが、偶然にも知財関係の知己の方と田中久重翁のことで盛り上がり、さらに共通の知己として御子孫の方にもお会いすることができ、田中家に伝わる貴重な御書籍を借り受けて、感動しました。それから現在に至るまで、私は研究を続けているところです。ちなみにその方も知財関係者です。

そういうことも長年あり、本連載を通じて、本稿の主要な読者である知財の皆様をはじめとして、更に幅広い方々へ向けて、日本の誇る発明家、田中久重翁の魅力について、ともに盛り上がるのが出来たら、筆者としてはとても幸せです。なお、知財関係の方々というのは、好奇心が広く、理系と文系、さらには芸術系にまたがる素養をお持ちの方が多く、そして「社会を住みやすく、創造的なものにしていくことに貢献していき

い、という理念と実務能力の双方を兼ね備えた志の高い」方が多いと感じています。そういう方々が楽しめる、「味わい深いコンテンツ」を創っていきたい、といつも思っています。

ちなみに、今号から科学・知財クリエイター改め、芸術・科学・知財クリエイターと名乗ることにしました。荒井寿光先生が私を、『科学・知財クリエイター』ではなく、「芸術・科学・知財クリエイター」です』と呼んで下さったことに因みます。

1. 昔の日本人の名前のこと

さてその前に一つ、お断りとして、本稿で執筆していく「からくり儀右衛門」こと田中久重翁ですが、以降は「ギエモン」と書かせて頂きたいと思えます。

現代人の我々にとって、昔の日本人が、同一人物でありながら、「複数の名称を使い分けている」ことは、文献資料を読む上でもしばしば混乱します。

例えば、幼名・仮名・諱（いみな）・本名・称号や官職の通称名などが存在し、秀吉でいうと、「日吉丸」「木下藤吉郎」「羽柴秀吉」「豊臣秀吉」「豊太閤」など複数の呼び名を聞かれたことがあるかと思えます。

ほかに、「別の人物が、その名を継いでいく」という慣習もあります。例えば、歌舞伎では、市川團十郎が13代に渡っておられるように、「田中儀右衛門」も「田中久重」も、2代、3代の方がいらっしゃいます。加えて、ギエモンは後に技術者として最高峰の称号「近江大掾（おうみだいじょう）」を授かりますので、田中近江大掾源久重と名乗られ、近江とも呼ばれます。

このように、場面に合わせて呼び名が変わっていくのですが、初見の状態においては、まだ好ましくないと思われます。まずは本稿の主人公が「目立ち」、「覚えられ易く」なるまでのしばらくの間は、「ギエモン」の愛称にて、進めていきたいと思えます。